

平成 22 年 6 月 15 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2008～2009
課題番号：20830127
研究課題名（和文） ロシアの社会変動と意識・階層の変化にかんする社会調査データの活用
研究課題名（英文） Data Analysis of the Research on Social Change in Russia: Values and Stratification
研究代表者
松本 かおり（MATSUMOTO Kaori）
神戸国際大学・経済学部・専任講師
研究者番号：80513796

研究成果の概要（和文）：

本研究は、1990年代以降のロシアの社会変動と意識・階層の変化について、これまで実施されてきた調査を、包括的に捉える試みである。第1の成果は、過去に報告者が実施した2000年、2004年ウラジオストク量的調査（ロシア・極東国立総合大学で実施。内容は主に職業威信調査・働くことに関する意識調査）の結果を総括するための論文を執筆・発表し、さらにこれまでのデータを活用するため、第3回目の継続調査を実施した。第2には、報告者がウラジオストクで実施した質的調査（ソ連崩壊後に急速に増加するプロテスタント団体のひとつである福音教会「生ける信仰」で行った牧師や信者に対するインタビュー、日曜学校や教会が取り組んでいる社会活動（麻薬中毒者に対するプログラム）の調査）の分析と解釈を行い、その成果を『ロシア——祈りの大地』として出版した。第3には、既存の社会調査の整理・再分析の一環として、東欧・ソ連の体制転換期にあたる1992-93年と96年にアメリカの社会学者M.Kohnらがウクライナで実施したパネル調査の再分析を試みた。

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成20年度	790,000	237,000	1,027,000
平成21年度	880,000	264,000	1,144,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,670,000	501,000	2,171,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：ロシア、社会変動、社会意識、階層、社会調査、ウラジオストク、職業、社会構造

1. 研究開始当初の背景

旧社会主義圏の社会意識・階層問題については、社会学が正式に認められない学問であった時代から、国内外で関心もたれてきた。たとえば、1950年代にアメリカの社会学者A. Inkelesが亡命ロシア人に対して職業威信調査を含めた社会意識調査を行い、ソ連のローガンとは異なる人びとの意識の実態を明らかにした。1970年にブルガリアで実施された国際社会学会では、ポーランドの社会学者W. Wesolowskiが、ソ連の社会学者M. Rutkevichの激怒を受けながらも、社会主義社会に社会的成層とよびうる社会的差異、すなわち階層が存在することを主張した。ロシアの社会学者でノヴォシビルスク経済社会学派のT. Zaslavskayaらは、ソ連社会を構成する社会階層間の利害の衝突を重要な研究対象ととらえ、イデオロギーにとらわれない社会階層研究を推進した。ロシアの社会学者O. Shkaratanらのソ連時代の社会移動研究では、量的にはソ連とアメリカの世代間の社会移動は近いものであったが、質的にはソ連の社会移動が管理されており、イデオロギーによって規定されたプロセスであったという結果が導き出され、ソ連・ロシアの階層研究における社会的文脈による解釈の重要性が確認された。旧社会主義国での大規模社会調査として特記すべきは、アメリカの社会学者M. Kohnらのポーランド・ウクライナの「職業とパーソナリティ」調査がある。階級・階層と意識の関係性にかんする国際比較調査として、体制転換期の初期である1992年、1996年に実施された調査で、ソ連崩壊直後の旧ソ連のウクライナのデータの変動は、ロシアの社会変動の方向性を見定める材料となる。

ロシアの格差・貧困問題については、国内

外に多くの研究がある。イギリスの社会学者D. Lane やロシアの社会学者O. Kryshstanovskayaは、ソ連時代とソ連崩壊後のエリート層の周流と再生産を、T. Gerberはソ連時代の共産党の幹部や党員であったことが社会移動に有利に働いたことなどを実証した。中間層については、ロシアの代表的な政治・経済雑誌『エクスペルト』に数多くの特集が生まれ、そのプロジェクトをまとめた『現実のロシア』には、不完全とはいえ新生ロシアで最初と自負される大規模職業威信調査が含まれている。貧困研究については、武田友加がロシアの家計パネル調査Russian Longitudinal Monitoring Surveyのデータを分析し、1990年代のロシアで約60%の人々が貧困に陥った経験をもち、人びとの生活水準が大きく変動していたことなどを確認した。

申請者が2000年から継続的に実施している調査では、国際比較、地域間比較、時系列比較という観点で、職業威信スコアを軸に分析を行い、ロシア社会の特徴と変化を追跡してきた。

このように多くの調査が実施されているが、各データが共有され、ロシア社会の変動をとらえた一連のつながりのある研究とはなっておらず、これらを包括的にとらえて振り返る必要があると報告者は考えた。

2. 研究の目的

1990年代以降のロシアの社会変動と意識・階層の変化について、これまで実施されてきた調査を、包括的に捉える試みである。ロシアで社会調査が開始されて約20年、共産党一党独裁の崩壊や、社会主義経済から資本主義経済への移行、貧困国から資源大国へ

の変貌など、歴史的に見ても大きな社会変動を経験してきた。現在では、大統領制をし、民主主義国家の体制を標榜しているが、その体制は周辺諸国から民主主義国に見られず、人びとの政治行動、経済行動の様式も複雑怪奇とされる。しかし、市民の意識や生活の変化と現状を正確に把握することなくしては、日口間の関係はおぼつかない。このような状況から、これまでに研究者各々の関心にまかせてロシアで収集されてきた社会調査のデータを総合的に振り返ったり、新たな視点で再分析したりすることが必要な時期にさしかかっており、さらにそれらを活用する必要があると、報告者は考えた。そこで、ロシアの社会変動をとらえる代表的な調査データを収集して、再分析するとともに、報告者自身が継続的に実施している調査の再検討と効果的な継続調査を試みることにした。

3. 研究の方法

1990年代初期から実施されてきた、全ロシア世論調査センターの報告書の収集、社会学の文献から代表的社会調査の実施状況を文献研究した。

報告者自身による調査研究の発展も試みた。量的調査の側面からは、申請者が2000年から実施してきたウラジオストク調査の2000年と2004年の時系列比較分析を行った。同様の調査は当時実施されておらず、10年の社会階層の変化をとらえるための貴重なデータとなると考え、2010年に第3回調査を実施した。

このように量的調査の分析を中心としてきたが、データの解釈を行うためには、当該社会の質的研究も必要であり、ソ連崩壊後の社会変動を映し出す現象のひとつとして、宗教に注目した。そして、ウラジオストクの新興宗教であるプロテスタント教会の人びと

へのインタビューを実施した。

さらに二次分析が可能な個票データとして、M.Kohnによる1990年代のウクライナ調査を用い、旧ソ連地域研究の観点から分析を試みた。

4. 研究成果

(1) 過去に自身が実施した2000年、2004年ウラジオストク調査（ロシア・極東国立総合大学で実施。内容は主に職業威信調査・働くことに関する意識調査）の結果を振り返り、総括するための論文を執筆した。主な結果は次のとおりである。第1には、社会が混乱すると収入、学歴、知識などが重視される方向に人びとの価値観は収斂されたが、逆に社会が安定するとそれらの価値は相対的に低下し、価値観が多様化したことがわかった。第2には、国としてのロシアの力の回復、秩序の回復、資本主義経済の浸透、政治の重要性の上昇などがみられた。

報告者の一連の調査は2000年当時実施されていなかった内容であり、社会変動を捉えるために活用できるデータであると考え、2010年3月に第3回調査を実施した。今後、これらのデータをもとに10年間の社会構造の変化を見出すための分析を行う予定である。

(2) ロシア・ウラジオストク市で実施した質的調査（ソ連崩壊後に急速に増加するプロテスタント団体のひとつである福音教会「生ける信仰」で行った牧師や信者に対するインタビュー、日曜学校や教会が取り組んでいる社会活動（麻薬中毒者に対するプログラム）の調査）の分析と解釈を行った。この調査では、学歴、職業、経歴からみてもロシア社会の中間層以上に入ることができず、市場経済の恩恵を受けることができなかった層のライフコースをたどることができ、以下のような成

果を得ることができた。第1に、1990年代のロシアで半数以上の人びとが貧困状態に陥った経験をもつことが先行文献で明らかにされているが、そのような状況で孤立した人びとの受け皿として大きな役割を担ったのが共同体としての宗教団体であった。第2に、アルコールを絶つことこそが信仰深さの証として語られていたことから、アルコール中毒問題が他のキリスト教社会と比べて深刻な社会問題であることがわかった。第3に、ロシア政府・ロシア正教の立場からは、プロテスタント教会がセクトとみなされているのに対し、プロテスタント教会の人びとは政府によるロシア正教の教育導入に反対しないなど、政府に対して従順な姿勢をもっていること、第4に、モスクワと比べてウラジオストクでは、信仰面でも中央からの影響が小さいことなどが明らかになった。

(3) 既存の社会調査の整理・再分析の一環として、東欧・ソ連の体制転換期にあたる1992-93年と96年にアメリカの社会学者M.Kohnらがウクライナで実施した「職業とパーソナリティ」大規模社会調査の再分析を行った。M.Kohnらは社会学理論の構築という見地で分析を行っているが、これまで地域研究という観点でデータが利用されることはなかった。短期間の変化とはいえ、マクロなデータからは見えない個人の職業移動の方向性や言語使用の変化など、地域研究者として興味深い結果が含まれていた。既存調査には必ずしも報告者自身が知りたい調査項目ばかりが含まれているとは限らないが、無用な調査を防いだり、過去のデータを活用したりするためには重要な作業であった。

以上のように、報告者は、体制転換期のロシアで実施された報告者による継続的な量的調査と質的調査、そして他の研究者による調査の二次分析を通じて、ロシアの社会変動

と社会意識を捉えることを試みた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

松本かおり「ウラジオストクの職業威信と社会変動：2000年・2004年ウラジオストク調査の時系列比較分析の結果から」『神戸国際大学紀要第77号』2009, 15-29.

P.Ya.バクラーノフ著、松本かおり訳「ロシア極東地域の開発戦略における自然利用」『アジア太平洋地域へ向かうロシア極東・再論：第24回日ロ極東学術シンポジウムの記録』2009, 45-53.

〔学会発表〕(計1件)

松本かおり「ウラジオストクの社会変動：時系列比較調査の結果を中心に」ロシア東欧学会2009年10月18日(秋田大学)

〔図書〕(計1件)

松本かおり「ウラジオストクのプロテスタント——破壊のあとに生まれた絆」津久井定雄他編著『ロシア——祈りの大地』大阪大学出版会2008, 191-216.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本かおり (MATSUMOTO Kaori)
神戸国際大学・経済学部・専任講師
研究者番号：80513796